

スペイン語における Wh 要素移動

- Focalization、Topicalization と Left Dislocation との比較から -

- その 2 -

Movimiento de los elementos [+Qu] en español

- en comparación con la Focalización, Topicalización, y Dislocación Izquierda -

- la parte segunda -

石岡 精三
Seizo ISHIOKA

2.3. Adjunct WH 要素の移動と方言差¹⁴⁾

これまで検討した Wh 移動は、項 (Argument) 要素のそれであった。以下の (20) と (21) で観察されるように、por qué 以外の Adjunct 要素が S 移動する用例は方言差を示す。

(20) A 方言 (Torrego 1984; Suñer 1994)

- a. por qué Juan quiere salir antes que los demás? (Torrego 1984:15b)
'why does Juan want to leave before the others?'
- b. cuándo Juan consiguió por fin abrir la puerta ayer (ibid.:15c)
'when did Juan finally get to open the door yesterday?'
- c. cómo Juan ha conseguido meter allí a su hijo (ibid.:15d)
'how has Juan managed to get his son in there?'
- d. [*] dónde María ha almorzado el último mes?
'where has María eaten lunch last month?'

(21) B 方言 (Arnaiz 1992; Goodall 1993)

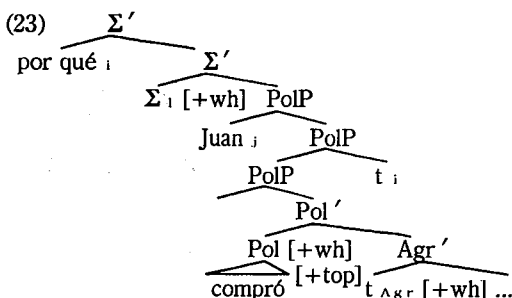
- a. por qué Juan compró ese televisor? (Arnaiz 1992:6b)
'why did Juan buy that TV?'
- b. * cuándo Juana se fue a Albuquerque (Goodall 1993:2e)
'when did Juana go to Albuquerque?'
- c. * cómo Juana se fue a Albuquerque (ibid.:2c)
'how did Juana go to Albuquerque?'
- d. * dónde María ha almorzado el último mes? (Arnaiz 1992:13a)
'where has María eaten lunch last month?'

A 方言では、Adjunct (cuándo, cómo) が移動する場合にも、主語 NP が定動詞の左方に出現する。

B 方言では、por qué 以外の Adjunct が移動する場合の主語 + 定動詞の語順が許容されない。最初に、以下の (22) の用例で、Adjunct (por qué) が移動するプロセスを検討する。当該 Adjunct が Agr よりも下位にある最大範疇に付加した位置に生成されると考えてみよう。この場合、(22b) は非文と予測される。Adjunct (por qué) が他の位置にも生成可能と考えてみよう。¹⁵⁾

- (22) a. por qué compró Juan ese televisor? (Arnaiz 1992:6a)
 b. por qué Juan compró ese televisor? (ibid.:6b)
 'why did Juan buy that TV?'

この生成位置として、PolP に右方付加した位置を想定する。つまり、Adjunct (por qué) は、[+wh] Pol の Checking Domain 内部に生成される (よって、PolP に左方付加した位置を経由する必要がない)。結果として、(22b) に対応する構造 (23) は、ECP の要請を満たす (ERM Barrier が介在しない)。¹⁶⁾



(20) の A 方言と (21) の B 方言の相違は、Adjunct Wh 要素の生成位置の相違に還元される。A 方言における Adjunct (cuándo, cómo) は、Adjunct (por qué) と同じ位置に生成可能と考えられる。これにより、(20b-c) が適格と予測される。B 方言では、porqué 以外の Adjunct がすべて、Agr' よりも下位の最大範疇に付加した位置に生成されると考えられる。これにより、(21b-d) の非文性が説明される。

A 方言における dónde の用例は問題を提起すると思われる。A 方言に属すると考えられる Torrego (1984) では、dónde の用例、例えば (20d) は非文と判断される。同じく A 方言に用例と考えられる (24c) の構造は、dónde が PolP に右方付加した位置に生成されることを物語る。つまり、本稿の仮説群は、dónde の用例 (20d) を文法的と判断する A 方言の Sub-Group が存在することを予測する (この予測については、更なる調査が必要)。

- (24) a. por qué a Paco ; ya no lo ; aguanta nadie? (Suñer 1994:35a)
 'why Paco can nobody stand him already?'
 b. cuándo a este hombre ; le ; levantarán un monumento? (ibid.:35b)
 'when for this man will they erect a monument?'
 c. dónde al mismo Allende ; lo ; mataron (ibid.:56b)
 'where Allende himself did they kill him'

3. 問題用例

3.1. Adjunct (siempre)

定動詞の左方に生起する副詞 (siempre (always)) と Wh 要素が共起する用例は、問題を惹起するようと思われる。以下の用例で示されるように、このタイプの用例に対する文法性判断には方言差が観

察される。(25a-b)と(26a-b)の相違に留意されたい。この方言差を、副詞(siempre)の生成位置の相違に還元することはできないと思われる。Brucart(1993)は、Suñer(1994)とTorrego(1984)同様、本稿のA方言に属すと考えられる(cf.Brucart 1993:fn.18)。

- (25) a. * qué siempre lee María? 'what does María always read?' (Torrego 1984:4b)
b. * qué siempre canta Luis 'what does Luis always sing?' (Brucart 1993:55a)
c. qué canta siempre Luis? (ibid.:55b)
d. qué canta Luis siempre? (ibid.:55c)

- (26) a. qué diarios siempre/nunca lee Juana? (Suñer 1994:53a)
'which newspaper does Juana always/never read?'
b. qué siempre ordena Juan en este restaurante (Arnaiz 1992:20a)
'what does Juan always order in this restaurant?'

Brucart(1993)は、(25b)の非文性をWh要素移動における定動詞のIからCへの義務的移動によって説明する(Cの直接下位の位置に定動詞が生起するIが想定されている)。(27a,b)で示されるように、当該副詞は定動詞の直前に生起する。

- (27) a. Luis siempre se prepara las clases (Brucart 1993:54b)
'Luis always prepares for the classes'
b. * siempre Luis se prepara las clases (Brucart 1993:54a)
'always Luis prepares for the classes'
c. * siempre, Lina lee dos diarios (Suñer 1994:fn.27)
'always, Lina reads two newspapers'

Wh要素がSPEC(C)位置へ移動する場合、Iにある定動詞が義務的にC位置へ移動すると想定されている。これにより、(25b)は、生成不能として非文と予測される(適切な派生として(25c)が指定される)。しかし、この論法は、(26a-b)の適格性を説明するものでない((26a-b)が適格と判断される方言において、定動詞のCへの移動が随意的に適用されると考えることはできない)。つまり、Brucart(1993)の論法は、問題を内包するものである。

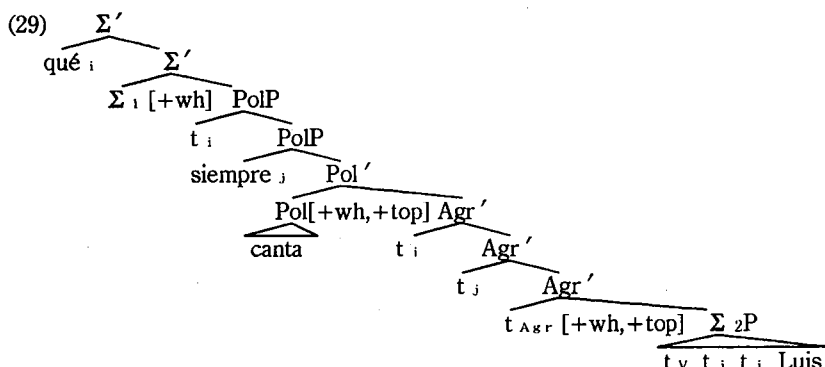
副詞(siempre)の生成位置を検討する。(27c)で示されるように、当該副詞に対するLD(Left Dislocation)の適用は排除される。PolPの左方付加した位置への移動、つまりTopicalizationの適用は許容される。結果として、(27b)はERMによって排除される(PolPに左方付加した位置へ移動した主語NP(Luis)がERM Barrierとなる)。同様の論法は、(27a)を非文と予測する。この予測は、事実に反する。この問題は、当該副詞に対するTopicalizationがSPEC(Pol)位置への移動によっても発動すると前提することにより打開されるであろう(この点で、(26a)に留意されたい。当該用例は、(nunca)と副詞(siempre)の着地点が同一であることを物語ると考えられる)。これにより、(27a)における[+top]要素(Luis, siempre)の移動は、ECP(ERM)の要請を満たすことになる(当該用例が適格と予測される)。¹⁷⁾

(25a-b)と(26a-b)の方言差は、素性[+wh]の伝達がPolに付与された素性[+top]の素性を義

務的に随伴する方言を想定する仮説 (28) により説明される (通常, Pol に付与された素性 [+top] が直接下位の Agr に伝達されることはない)。

(28) Hypothesis: In a certain dialectal group (e.g. that of Brucart (1993)), the transmission of the feature [+wh] obligatorily accompanies the transmission of the feature [+top] assigned to Pol.

Brucart (1993) の用例 (25b) は, ERM (ECP) によって排除されることになる。構造 (29) において, Agr' に左方付加した位置にある痕跡 (t_j) が ERM Barrier を構成する。



3.2 .NPI (Negative Polarity Item) と Focalization

本稿の仮説群は, NPI が生起する (30a-c) を適切に説明する。NPI は, SPEC(Pol) 位置へ移動する。また, 定動詞の直前に生起する主語 NP は PolP に左方付加した位置へ移動する (Topicalization)。よって, (30b-c) は生成不能として, 非文と予測される。

- (30) a. ni siquiera un alma vio Juan en el cementerio (Toribio 1993:p.150,52a)
 b. * ni siquiera un alma Juan vio en el cementerio (ibid.:p.150,52b)
 'not a soul did Juan see at the cemetery'
 c. * creo que nunca Juan canta (Laka 1993:fn.6)
 'I think that never does Juan sing'

同様の論法は, Adjunct NPI (apenas) が生起する用例 (31b) を非文と予測する。(31b) の適格性と同様に, Adjunct NPI (nunca) が生起する (30c) の非文性は相対立する用例である。少なくとも, 本稿の仮説群は, NPI (apenas) が SPEC(Pol) へ移動する派生としての (31b) を非文と予測する (後述するように, (31b) は NPI に Focalization が適用された派生として説明される)。

- (31) a. apenas había llegado Juan cuando llamó Pedro (Toribio 1993:p.149,55a)
 b. apenas Juan había llegado cuando llamó Pedro (ibid.:p.150,55b)
 'hardly had Juan arrived when Pedro called'

(32) で観察されるように, NPI に対する Focalization の適用は許容される。¹⁸⁾

- (32) a. CON NADIE i dice Juan que María habló t i (Zubizarreta 1994:fn.20)
 WITH NPBODY says Juan that María talked
 b. A NADIE i piensa María que le i examinó el médico (ibid.)

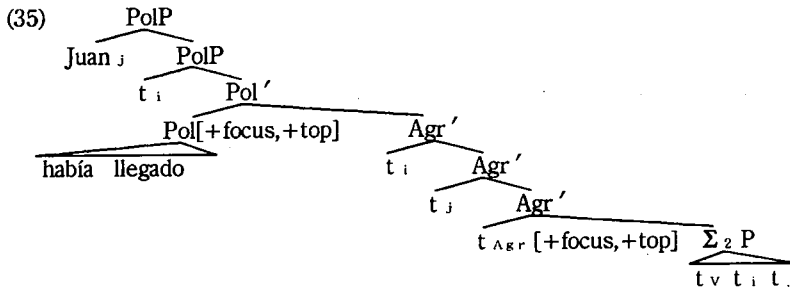
NOBODY_i thinks María that him_i examined the doctor

ここで、NPIに Focalization が適用された派生としての (30a-b) と (31a-b) を検討する。素性 [+neg] を付与された Pol に対してさらに素性 [+top] が付与された場合、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] の伝達・受け継ぎがこの素性 [+top] を随伴すると考えてみよう ([+focus] NPI が、SPEC (Pol) を経由して Σ_1' に左方付加した位置へ移動すると想定する)。この場合、(33b) と (34b) は非文と予測される (ECP 違反)。

- (33) a. NI SIQUIERA UN ALMA_i vio Juan_j en el cementerio
 b. NI SIQUIERA UN ALMA_i Juan_j vio en el cementerio

- (34) a. APENAS_i había llegado Juan_j cuando llamó Pedro
 b. APENAS_i Juan_j había llegado cuando llamó Pedro

これは、(34b) に対応する構造 (35) によって示される。Agr' に左方付加した位置にある中間痕跡 (t_j) が ERM Barrier を構成する。結果として、構造 (35) は、ECP によって排除される。



ここで、Adjunct NPI に素性 [+focus] が付与される場合に限り (つまり、同時に Σ_1 に同一素性 [+focus] が付与される場合に限り)、当該素性の伝達に随伴する素性 [+top] の Agr への伝達・受け継ぎが随意的に適用される方言 (Toribio 1993) を想定する (この方言グループを α 方言と呼ぶ)。一方、他の方言 (Laka 1993) では、[± Adjunct] NPI に付与された素性 [+focus] の伝達に随伴して発動する素性 [+top] の伝達・受け継ぎが義務的に適用されると考える (β 方言)。結果として、本稿の (31b) は、Adjunct NPI (*apenas*) に素性 [+focus] が付与された α 方言の用例として説明される。この場合、[+top] 要素である主語 NP (*Juan_j*) が Agr の Checking Domain を通過する必要がない (β 方言としての用例は、ECP (ERM) によって排除される)。¹⁹⁾

3.3. Cliticization (HMC (Head Movement Constraint) との関連から)

V の sister 要素は、SPEC(Agr₀) へ移動することにより、対格 (Accusative) を付与される。Clitic (CL) は、Agr₀ に基底生成される (Mendikoetxea 1993; Zubizarreta 1994)。本節では、不定法節における CL の Enclisis を説明する Mendikoetxea の説明法が、基本的に [+Finite] CP 内の Proclisis にも拡張可能であることが示される (Enclisis と Proclisis の相違は、T の素性 [± temporal] に還元さ

れる)。²⁰⁾

Mendikoetxea (1993) は、(36a,b) に観察される CL の Enclisis を、V が Agr₀ を飛び越えて、少なくとも T 位置へ移動すると前提することにより説明する (V が T 位置へ移動することにより、不定法形態が生成される) (構造 (37))。²¹⁾

(36) a. insultar- le fue un error (Mendikoetxea 1993:35b)

b. * le-insultar fue un error
to insult him was an error

c. Juan lo lee
Juan it reads

d. Juan no lo lee
Juan not it reads

e. * Juan lo no lee

(37) ...[_{TP} V_i + T][_{AgrOP} CL][_{VP} t_i ...] (Mendikoetxea 1993:36b)

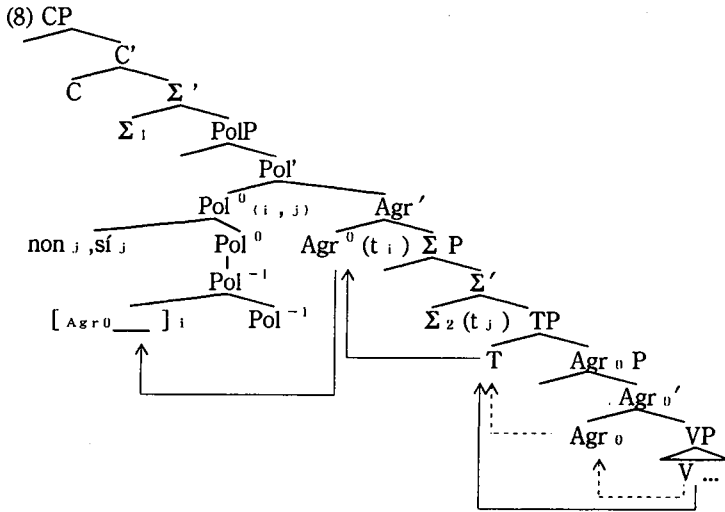
↑

(37) における主要部移動は、HMC に違反する。この違反は、以下の前提によって回避される。[-temporal] である不定法節における T は、A'-Head と指定される。一方、V の sister 要素である NP が SPEC(Agr₀) 位置で対格を付与されるため、Agr₀ が A-Head であると仮定される。Rizzi (1990) の Relativized Minimality を A'- vs. A-Head に拡張することにより、上の主要部移動が惹起すると思われる HMC (ECP) の違反が回避されることになる。さらに、不定法形態の生成が Agr₀ を飛び越えた主要部移動によることは、不定法形態に Agr₀ による一致形態素が顕在化しないことによっても例証されると言う (ibid.:p.222)。²²⁾

一方、[+Finite] CP 内における CL (Agr₀) は、Agr⁻¹ の左方に V が移動する Selected Slot (SS) をもつと考える (ibid.:p.221)。CL を内包する Agr₀ は、循環的に上位のゼロ範疇位置へ移動する。これにより、[+Finite] CP における CL の Proclisis が説明される。前述のように、少なくともスペイン語の [+Finite] CP においても、Agr₀ による一致形態素が顕在化しない (fn.22)。

そこで、本稿では、不定法節内と同様、[+Finite] CP 内にある V が Agr₀ を飛び越えて T 位置へ移動すると想定する。[+Finite] CP 内の T は、[+temporal] と考えられる (よって、この場合の T は A-Head となる)。結果として、同じく A-Head である Agr₀ が V の痕跡に対する Potential Antecedent Governor となる。つまり、この場合の V から T への移動は ECP (HMC) に違反する。この違反を回避するため、Agr₀ (CL) が主要部移動する必要が生ずる (CL が上昇移動する Trigger)。

以下に再掲する本稿第一部の構造 (8) において、V を含む T の複合体は、Σ₂ を越えて Agr⁰ の SS 位置へ移動する (これによって生成した Agr⁰ の複合体は、Pol の SS 位置へ移動する)。この T の複合体が惹起する HMC 違反は、Σ₂ (non, s_i) が (最上位の) Pol⁰ に左方付加した位置へ移動することにより解消される (この付加移動により、Σ₂ の指標が最上位の Pol⁰ に浸透する)。



Agr₀ (CL) は、Σ₂が付加移動している Pol⁰ に左方付加することはない。この移動は、ERM により排除される（当該 Pol⁰ に左方付加した位置に移動している Σ₂ (*non*, *sí*) が ERM Barrier を構成する）。結果として、Agr₀ (CL) は、上位の Pol⁻¹ に左方付加した位置へ移動することになる。この移動は、Cliticization の着地点として、Agr⁰ を含む最小範疇を指定することにより正当化される。これにより、(36c-e) で観察される [+Finite] CP 内における Proclisis が説明される。²³⁾

3.4. Wh 島内部からの移動における Resumptive Clitic ²⁴⁾

本節では、長距離移動する Wh 要素に対応する Resumptive Clitic (*lo*) が生起する (838b) と対応する Clitic を随伴しない [38a] の相違が検討される ((38a,b) は同じタイプの用例であり、長距離移動する要素が *embd.V* の目的語であり、短距離移動する要素が *embd.V* の主語となっている)。つまり、長距離移動する Wh 要素に対応する Resumptive Clitic が派生を適正化する機能をもつ。

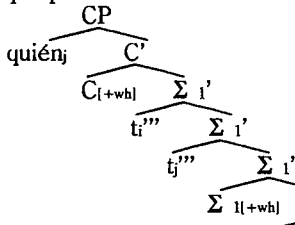
- (38) a. *qué película no recuerdas quién dirigió en el cincuenta y uno? (Torrego 1984: 69)
 'what movie don't you remember who directed in '51' ?'
 b. qué libro_i no sabes quién *lo*_i compró? (Contreras 1992: 11b)
 'what book don't you know who bought it (*lo*)?'
 c. quién no sabes qué película dirigió en el cincuenta y uno? (Torrego 1984: 68)
 'who don't you know what movie directed in '51' ?'

最初に、(38a) が排除される要因を確定する必要がある。(38a) と (38c) の比較において、(38a) の非文性を境界理論 (Subjacency) 違反に還元することはできない ((38c) が適格と判断される関係で)。

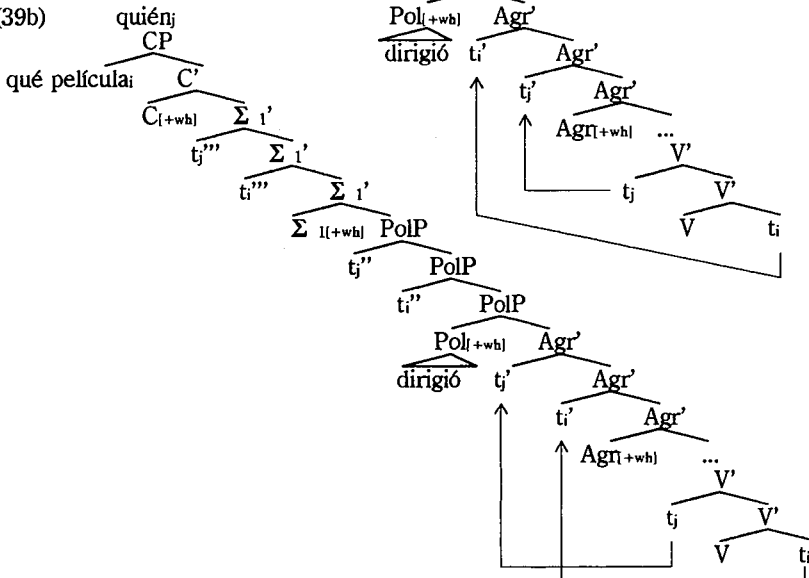
(38a) と (38c) に対して、それぞれ構造 (39a,b) が想定される (主語 NP は、V の最大投射に左方付加した位置に生成されると想定される)。石岡 (1995) と同様に、以下の仮説が設定される。(40) は、一定の条件下で Referential Wh 要素に対する同定要件 (先行詞統率) が束縛 (Binding) によって

代行可能であることを示す。(41)は、認可要件（適正主要部統率）と移動経路の関係について規定している。

(39a) qué película:



(39b)



(40) Hypothesis:

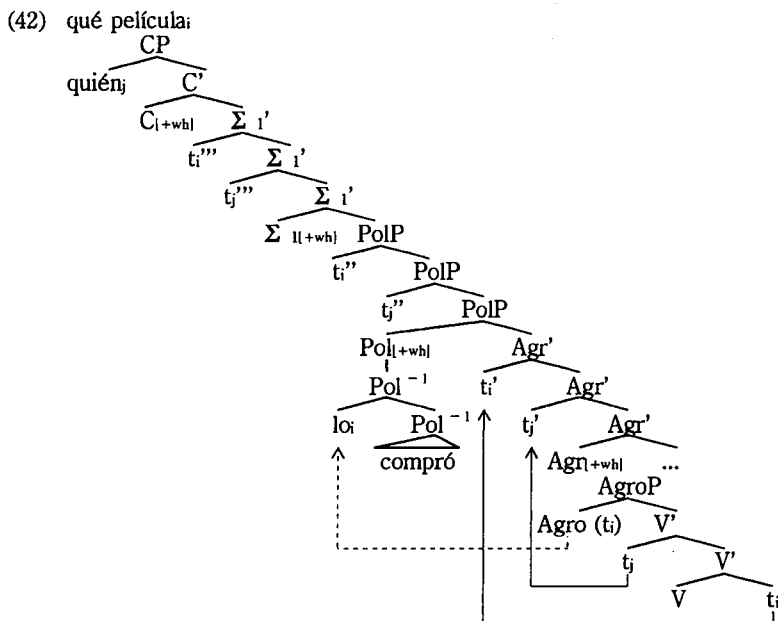
With respect to a referential long-distance movement [+wh] element, the requirement of identification may be fulfilled by Binding in non-root contexts.

(41) Hypothesis (Path Containment Theory):

X^0 cannot head-govern/license [+wh] YP whose path is wholly contained in another [+wh] ZP's path.

(39a)において、移動経路 (t_j', t_j) は移動経路 (t_i'', t_i) に完全包含される。よって、Pol が痕跡 t_j' を主要部統率することはない（仮説 (41)）。結果として、構造 (39a) に対応する (38a) は、ECP によって排除される。一方、(39b) において、これに類似する違反が観察されない（移動経路が完全包含関係にない）。Non-Root Context において、長距離移動する Referential Wh 要素に関する同定要件が Binding によって代行可能と規定する仮説 (40) により、(39b) におけるすべての痕跡が同定要件を満たす。結果として、(39b) に対応する (38c) は、文法的と予測されることになる。

(38a) の非文性を説明する論法は、(38b) をも非文と予測する。明らかに、この予測は事実と反する。この問題は、長距離移動する Wh 要素に対応する Resumptive Clitic の機能を考察することにより打開される。(38b) に対して、構造 (42) が想定される。



この Resumptive Clitic の機能として、何を想定すべきであろうか。本稿では、認可要件（主要部統率）に関する違反を解消する機能を当該 Clitic に想定し、以下の仮説を設定する。

(43) Hypothesis:

Any path of an accusative NP may be replaced by the path of the clitic corresponding to the accusative NP involved.

(42) において、移動経路 (t_i' , t_i) は、Resumptive Clitic (lo) の経路によって置き換えられる。当該 Clitic の経路と移動経路 (t_j' , t_j) は完全包含関係を形成しない。よって、構造 (42) におけるすべての痕跡は、ECP の要件を満たす。構造 (42) に対応する (38b) は、文法的と予測されることになる。

4. 結語

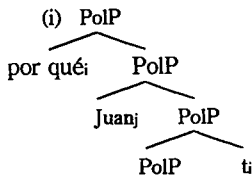
本稿において設定された仮説群が、例えば、D-Linked Wh 要素と複合 Wh 要素が関与する以下の用例を検討・吟味した上で、更に修正を必要とすることは言うまでもない（[主語 + 定動詞] の語順が許容される点に留意されたい）。

(44) [*a cuál de los amigos de Ignacio;* Susana *lo* invitó a su cumpleaños? (Jiménez 1995:9b)
 'which one of Ignacio's friends did Susana invite to her birthday party?'

(45) (?)*qué platos* Juan ha preparado para la comida? (Arnaiz 1992:10b)
 'what/which dishes has Juan prepared for dinner?'

註

- 14) 本稿は、日本ロマンス語学会第33回大会(1995年5月20日)における研究発表に修正・拡張を加えた論考の第二部である。併せて、第34回大会(1996年5月19日)における研究発表の内容も含まれる。
- 15) Rizzi(1990)とGoodall(1992, 93)では、当該 Adjunct が Spec(C)位置に生成されると想定される。
- 16) Adjunct (*por qué*)の痕跡は、ERM Barrierを構成することはない(定義(10))。仮に、当該 Adjunct 最上位の PolP に左方付加した位置を経由すると考えてみよう。構造(i)で示されるように、この場合の派生は、ERMによって排除されるように見える(主語 NP (*Juan*)が ERM Barrierとなる可能性がある)。この問題は、ある最大範疇(この場合、PolP)内部に基底生成された要素が同じ最大範疇に左方付加した位置に移動した場合、ERMの適用が停止すると考えることにより打開される。



- 17) 副詞 (*siempre*) は、AgroP に左方付加した位置に基底生成されると考えられる。これにより、以下の (ib-c, ie) の予測が可能となる(更なる調査が必要)。
- (i) a. Luis siempre se prepara las clases (Bruccart 1993:54b)
 b. Luis se prepara siempre las clases
 c. *Luis se prepara las clases siempre
 d. me acordaré siempre de ti (Sánchez Pérez 1985:p.1737)
 e. *me acordaré de ti siempre
- 18) NPI に対する LD の適用は排除される (Zanuttini 1991)。
- 19) この論法が妥当するためには、Adjunct NPI が Agr' よりも下位の位置(例えば、否定要素 (*no*) が生成される Σ_2 の SPEC 位置)に生成される必要がある(Adjunct NPI の生成位置に関しては、稿を改めて検討する)。
- 20) Clitic には、二重波線を付す。同様に Enclisis が観察される肯定命令文と現在分詞を含む文に関する考察は、稿を改める。
- 21) T 位置で生成された不定法形態がさらに上位のゼロ範疇位置へ移動すると想定されている(詳細は示されないが、当該形態が循環的に C 位置まで移動する可能性がある)と指摘する)。本稿では、[+Finite] CP 内と同様に、不定法形態を含む複合体が少なくとも Pol 位置まで移動すると考える。
- 22) 少なくとも、スペイン語の [+Finite] CP においても、Agro による一致形態が顕在化しない。後述するように、本稿では、[+Finite] CP 内における V もまた、Agro を飛び越えて移動すると考える。
- 23) V が T 位置へ移動した段階で、Agro (CL) が当該 T に左方付加移動する可能性も考えられる。本稿では仮に、Agr が V と動詞形態素のみを含む複合体である T を選択すると考える。一般的に、V に関するゼロ移動が完了した段階で CL が移動すると想定される。
- 24) 詳細は、石岡(1995)とIshioka(1996)を参照されたい。

参考文献(本稿第一部に未掲載の文献のみ)

- Contreras, H. (1996). "Economy and Projection." Parodi, Claudia, C. Quicoli, M. Saltarelli, and M. L. Zubizarreta (eds.) *Aspects of Romance Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Fontana, Joseph M. (1994). "A Residual A-Bar Position in Spanish." *WCCFL* 12, 251-266.
- Ishioka, S. (1996). "Accusative Resumptive Clitic Strategy in Spanish." Nagaoka University of Technology, *Bulletin of Language Science and Humanities* 10.
- Jiménez, María-Luisa (1995) "XP-Preposing in Spanish." *WCCFL* 13, 253-269.
- 石岡精三(1995)。「スペイン語における Wh 要素島内部からの [+top] 要素の移動について—Wh 要素移動との比較において」長岡技術科学大学「言語・人文科学論集」9.